

第五回 AJ フォーラム (研究会)

グローバル化の中の隣国関係——日韓関係を中心に

日程：2006年6月17日(土)

場所：国土舘大学世田谷校舎 中央図書館 AV ホール

木村 幹 (神戸大学大学院国際協力研究科)

東アジアの国際関係は大きく変わりました。これまでの韓国の体制は冷戦の産物、南北分断の産物で、押し付けられた政治体制でした。少し前までは、国際関係が非常に限定されていました。韓国の貿易高を見ると、60年代では日本単独で韓国の貿易高のシェアが全体の40%に達していました。アメリカを足すと70%を超える割合になります。韓国は90年代に入るまで、事実上国際的には孤立していて、経済的に発展するまで東南アジアとも交流がなく、友好国は植民地化された日本とアメリカといういびつな状況にありました。けれども、それが韓国人の考え方なのか、自分達の力がつくまでその状況を受け入れようとしたのです。彼らは協調しないと国際社会の中で生き抜いていけないという意識があり、冷戦時ということもあいまって、日本とアメリカと強い関係を結んでいたのです。

しかし、冷戦は終わり、ソ連や中国とも関係を結べるようになりました。これにより、韓国の国際的な選択肢が飛躍的に増えたわけです。特に隣の中国と関係が持てるようになり、加えて北朝鮮が弱体化しました。そういった中で、韓国にとって日本とアメリカの重要性が低下しています。今は、60年代、70年代に比べシェアが減っています。とはいえ、新しく台頭してきた中国も、全体から見れば18%程度のシェアです。いかに当時の日本が極端に重要だったのかというのが、分かっただけだと思います。そして、例えば、中国との関係によって日本の重要性が減ったのかということ、そういうわけでもなくて、韓国にとっての選択肢が広がってきているだけのことであり、それがグローバル化なのです。人的移動に関しても同じで、海外旅行者の数は増えたのですが、南米や北欧などチョイスもその分増えたので、日本やアメリカに渡航する人は特に増えないのです。

日本では、日韓関係というのは最近どんどん重要になってきているといわれますが、シェアや観光客数を見るとそうでもありません。日本も韓国も経済成長はピークを乗り越え、安定成長に入っています。グローバル化が進む中で、東アジアにおいては、それまで大きかった日本の存在の他にも選択肢が出てきて、全体像が必然的に変わってしまっているのです。戦略的な重要性も、冷戦中は日本と韓国はアメリカを介してつながっていたのですが、現在は日韓が安全保障や戦略的なパートナーとして話し合う必然性が減っています。同時にお互いにとって社会的な重要性も下がり、学会の交流でも市民団体レベルでも、最近では東南アジアなど別の地域との交流の比重が大きくなっています。

政治においては、韓国では政党や政治家、組織に対する一般の信用が非常に低く、大統領型の個人的なリーダーシップに頼る体制をとっています。したがって国内政治の方が重視されることになり、外交問題が大きく取り上げられるのは総裁選挙のときだけです。これは日韓の良く似ている点でもあります。政党や議会、政府そのものに対する信頼が低い。政治が個人の信頼で持っているのです。選挙の参加度も低いので、誰が大統領になるのか確実な予想ができない状態です。また、韓国人のナショナリズムも実は低迷しています。例えば竹島問題も歴史問題も、実は現実味を感じて取り組んでいる人はきわ

めて少ないのです。

それ以外に目につくポイントとして、政治に影響力がある少子高齢化も問題になっています。未来を担う人口が増えないということは、社会が変化しないということです。例えば今の日本の若い人たちも、団塊世代ほどの政治力や重要性を持ち得ないのです。韓国はさらにひどく、出生率も日本より低いからです。現在 40 歳代くらいの 386 世代が永遠に力を持ったままになるでしょう。つまり歴史問題も朝鮮戦争も知らない人たちが先々ずっと韓国の世論を担っていくことになり、これからもその状況はあまり変わることがないでしょう。

グローバル化によって東アジア諸国の結びつきは、強まるどころかむしろ希薄になってきています。とはいえ隣国であることに変わりなく、日本と韓国はお互いにとって重要だと認識し合わなければいけません。国際関係が進展する中で、隣国同士が以前ほど影響し合わなくなった今は、どうやって友好関係を保つか、いかに冷静な国際関係が重要かということを考えていかなければならないと思います。今の東アジアには構造的な問題があり、またグローバル化によって国際的な選択肢も多くなっているので、これをまじめに考えていかないとアジアの共生は難しいでしょう。